

銀杏

発行所

〒792-0835

新居浜市山根町8番1号

曹洞宗瑞應寺専門僧堂

編集発行 瑞應寺

電話(0897)41-6563

FAX(0897)40-3127

<https://zuioji.jp>

奇数月1日発行

(振替 01330-2-31918)

瑞應寺

印刷所 東田印刷株式会社

碧巖録物語独語【三十八】

後堂 門 原 信 典

第十九則「俱胝一指頭」麻語⑱
抑下托上⑳

【評唱】玄沙師備禪師のこと。(二)

【昼夜の辨道】

「つひに雪峰山のぼりて、真
覚大師に参じて、昼夜に辨道す」
謝三郎は父親の死を機縁として
菩提心を起こし、雪峰義存禪師
真覚大師の下に身心を投げ入
れて二十四時間全てが坐禅に
裏打ちされた辨道を勤められ
ました。

長い間修行道場で雲水さんの
様子を見ていると、私自身の修
行のお手本になり、私自身の振
り返りが生まれてきます。例え
ば歩き方、食事の作法等、平常
底に修行が現れてきます。私も
立場は指導者ですが、同行同修

のご縁を有難く思います。

私では気づかないところをみ
佛様は見下さるのです。坐禅
をすればするほど、自分も周囲
の人も含めて日常生活の一つ一
つ、後ろ姿をも疎かに出来なく
なります。

坐禅から生活が生まれてこ
そ、お釈迦様に直結する佛祖正
伝の坐禅になるのです。

宗門の坐禅はそこに在ります。

【この足の痛みは十二?】

「あるときあまねく諸方を
参徹せんため、囊をたずさえて
出嶺するちなみに、脚指を石に
築著して、流血して痛楚するに、
忽然として猛省してはいはく、是
身非有、痛自何来、すなわち雪

峰にかへる。」「囊」は「袋」のこと

です。修行生活に必要なお袈裟
や応量器などを入れる大きな袋
の事です。玄沙禪師は自分を捨
てて修行されていたはずでした
が、諸方の坐禅人に参ずる為に

雪峰山を出て嶺南に向かいま
す。嶺南は中国の南部の「五嶺」
(南嶺山脈)よりも南の地方の
事で現在の広東省、湖南省、江
西省等を指すそうですが、当時
嶺南地方には禅の修行道場が沢
山あり、したがって禅の指導者
も多く、自分の探している「何
物か」が見つかるのではないかと
修行の旅に出たのです。その
志を認めた雪峰義存禪師も大力
量の人でした。

ところが玄沙禪師は峠を越え
ようとしたときに、石に躓いて
生爪を剥がし流血します。

「楚」は耐えきれないほどの
痛みという意味で「痛楚」とは、
ひどい痛みと苦しみの事。それ
は怪我をした外傷の痛みだけで
はなく、自分自身の道心の痛み
でもありました。

たちまち猛省します。私は
せっかちで若い頃は太股でドシ
ドシ歩いていたのでよく足の小

指を柱や家具の角にぶつけて骨

折したのではないかと思うくらい
の痛楚にうずくまった事は何度
もあります。修行が身に付いて
いない、脚下照顧してない証拠
です。私には修行力も無いので、

「あまたやつてしまった」と悔
しがるだけで、反省も何もあり
ません。ところが玄沙禪師の反
省は「しまった怪我をした。こ
れからお寺を巡り歩かなければ
いけないのに困った」と言う単
純な事ではなく「此の足の痛み
は何か?」と猛烈に痛楚を省み
たのです。雪峰山での昼夜の辨
道が導いたのです。反省の中身
が私とは天地懸隔です。

【霧の中を歩む】

玄沙禪師は、釣り人謝三郎の
時から佛法の中で魚を釣ってい
たのです。正法眼蔵随聞記の
五・三に「古人云く『霧の中を
行けば覚えざるに衣湿る』と。
よき人に近づけば、覚えざるに
よき人となるなり」とのお示し
があります。

これは宗門では「薰習」と云つ
て私達の修行の在り方のことで
す。知らない内に香の薫りが身

に付くように学び習っていく事

です。「学ぶとは真似る事」今で
云うゲリラ豪雨の如く、ちよつ
と雨に遭えばびしょ濡れになる
ような激しいものではなく、霧
の中をゆっくり歩くといつの間
にか衣が湿っているように、何
よりも修行道場に身心を置け
ば、必ず知らない内に道場の

行持が身心に染み込んでくるの
です。「よき人に近づけば云々」
よき人とは尊敬する参学の師
(指導者)であり、同行の仲間
でもあります。その修行に自分
の全てが包みこまれます。「参
徹」とはこの事です。さらに云
えばみ佛様です。

「み佛様に近づけば、覚えざ

るにみ佛様になるなり」です。
私も振り返れば、今でも迷い
ながらも、困りながらも、佛縁
の中を歩かされています。私の
迷惑に関わらず何かに仕組まれ
ていると思えません。不待
なのです。

お寺には生まれましたが、参
学の師、道の先輩、同行の仲間、
道友に会わなければ、どんな人
間になつていたかわからない怪
しい私です。

前世があるならば、こういうご縁を作って導いていただいた前世の全てに感謝するだけです。

【修行の功德を回らし向ける】

謝三郎も釣り人故に菩提心が起きたのです。どういう事でしょうか。

この「釣り人」で思い出した事があります。

東日本大震災からちょうど一年目の日に法事をお勤めしました。

法事が終わって、そのまま私はフト思いつき「東日本大震災から今日で一年、少しお時間をいただいて、亡くなられた方のご供養を皆さんと一緒にさせていただきますい」とお願いし「舍利礼文」と云うお経と、本尊称名「南無釋迦牟尼佛」を唱えさせていただきました。

その日から、法事の度に、読経の功德を少しでも全てに回らし向ける「回向」と云う事で、自然災害だけではなく、戦争や交通事故、理不尽な事件事故で亡くなられた人、参列された皆様それぞれのご縁のあるご先祖様、いつも心に念じているご縁

の方等にも思いを巡らしていただき、短い時間ですが共に供養をさせていただいております。

ある日の法事で、私より五六歳若い方が「和尚さん、さっきの震災の供養有難うございました。私の友人も被災しております」と言っていて「佛教ではああいう災害はどんな風に考えたら良いですか?」と尋ねられました。

【生縁を大切に】

私は「東日本大震災は、人ばかりでは無く一瞬にして破壊された自然も建物も甚大だったから、それは忘れられない事だけれど、自然災害は世界中で起きています。そして、周りを見れば人災ともいえる理不尽な事件、事故、或いは突然の病気で亡くなる方もあります。実際に私の友人も何人か亡くなっています。近年は特に自然災害が多いけれど、第二次世界大戦では日本人だけでも三〇〇万人以上の方が亡くなられたと云われています。しかし、死ぬのはいつでもどこでも誰でも私一人なのです。偉大なるたった一個の命、

一人の命です」と話しました。

「それはどういう事かなあ。良い人も悪い人も関係無いかなあ」と言われるので、私は「佛教と云う事だけでは無いけれど、私たちが葬儀を勤めるときに、その回向の言葉に『生縁』すでに尽きて大命にわかに落つる」という言葉があります」と続けました。「生かされている縁」が尽きたら、無くなったら死ぬ。これは真実です。どんな生命も例外はありません。

反対に云えば、人間だけでなく動物も植物も「生縁」があつて、今本当に危ういところを生かされているだけです。だからこそ今この「生縁」をお互いに大切にしていけるのです。それが「生きてても良いよ」と云うみ佛様の励ましです。辛くても悲しくても、生きていく事を実感していてもいなくても、無条件に生かされているお互いのこの生命です。私たちは自分の意志で生まれ生きて死ぬではありません。今私は「生縁」をいただいて、ただこのように支えあつて生かされているだけです。

【釣り上げられる魚は私?】

「例えとしてはおかしいかもしれないけれど、魚が網にゴソッと掬われるようなものかなあ。人が一人死ぬのも、魚が釣り人にちよいと釣り上げられるようなもの。良い人悪い人と言つても人間が勝手に言っているだけ」そう言いました。金子みすゞさんの「いわしのとむらい」という詩もありますが、これは私の言葉ではありません。もう四十年以上も前に読んだ小説の中の言葉だつたと思います。中身は覚えていませんが「すごい事を言う人だ」と思ったのを覚えています。

その話をしたら「ああそうじゃなあ。網からこぼれる魚もおるわなあ。良い魚も悪い魚も無いしなあ。なるほどなあ。そういうことか」と妙に納得をされました。「死ぬという事は魚が釣り上げられるようなもの」釣魚船上の謝三郎は魚を釣り上げる度に、その事が無意識のうちに謝三郎の身心の内に染み込んでいったのではないのでしょうか。魚釣りが好きなだけに魚の生態はよくわかる。そして魚の気持

ちもわかつてきたのか、知らず知らずに釣り上げた魚と自分が重なつてきたのでしょうか。故に父親が溺れた事によつて無常観が決定したのです。

生まれる時も死ぬ時もたった一人。足の生爪を剥がして痛楚に耐えるのも私一人の事。

「色即是空」形あるものは実体がないと簡単に云いますが、この私の体も心も「空」だとして、この足の痛みは何がどう痛いのでしょうか、何故痛いの、何故「空」である私が痛いの、私は何故悩まなければいけないか。何故苦しまなければいけないか。私は何処から来て、何処に行くのか。

「空」とは、現実の私の実体が無いという事ではありません。全体の事です。「空即是色」過去現在未来を含めた全体が常に私を生かして育てているのです。そしてこの私も全体を生かしているのです。無限の生命、時間、空間と共に在る一人のお互いなのです。

さて、「痛い痛い」は何処から来て、何処に飛んでいくのでしょうか?

(続く)

はてしない飲酒の害悪

はてしない発心の功德

高岩寺 来馬明規

東京巣鴨とげぬき地蔵尊高岩寺住職 医師 医学博士
東北福祉大学客員教授 日本禁煙学会役員

【はじめに・禁煙なら禁酒?】

「お酒は飲むんですか?」

「お酒なら良いのか?」

筆者は医僧として、タバコ問題に關与してきましたが、いつも訊かれるのはタバコと共に依存性薬物の双壁をなす、酒に關する質問でした。

釈尊の時代より、「不飲酒戒」(飲酒を禁じる教えを持つこと)は、

仏教僧としての出発点であるはずですが、日本の仏教の歴史の中で、禁酒の戒律はそれほど厳格ではありませんでした。【図1】(1)

飲酒行為は一般社会においても医学・心理学から法律・政治・社会・経済・農業など、さまざま



【図1】我が国は僧侶の飲酒におおらかである

な視点・論点がありますが、本稿では

① 最新の研究により、酒には「適量も安全な量もない」ことが結論づけられたこと(Jカーブ現象の否定)

② 仏教の經典には飲酒の害悪が厳しく指弾されていること

③ 道元禪師は明確に飲酒を禁じているが、その一方で「酒に酔った勢いで得た仏縁であつても発心は尊い」と述べていることについて、ご紹介しましょう。

【酒に適量なし・飲まないのが最良】

アルコールは長い歴史のなかで日常に深く入り込み、社会に広く受容されてきました。しかし「お酒」などと「御」をつけて美化することは、筆者は不適切と考えます。

なぜなら、アルコールは国際がん研究機関(IARC)が「グループ1:発がん性が確実な物質」と定める「毒」であるからです。(2) 飲酒で肝がん・大腸がん・食道がん・頭頸部がんが確実に、胃がん・乳がんはほぼ確実に増加します。世界保健機関(WHO)の2024年の報告では、世界で年間260万人がアルコール摂取が原因で死亡しています。

そのようななか、「酒は適量を守ればむしろ体に良い」という学説が、つい最近まで支持されてきました。これは「Jカーブ現象」

【図2】とよばれ、1990年代までの疫学調査の結果に基づいています。アルコール換算で、週に100グラム程度の少量を摂取する集団は、全く飲まない集団よりもむしろ寿命が長い、という統計の結果です(図2実線)。醸造会社も「中庸の徳」のように喧伝し、部分的に飲酒を正当化する根拠となってきました。(3)

ところが統計結果を見直して再調査すると、飲酒はたとえ少量でも健康に悪影響があることが相次いで示され、現在は「飲酒に適量も安全な量もない」ことが明らかになりました。

ではなぜ過去の調査では「適量飲酒が長生き」と結論されたのでしょうか? 初期の疫学

研究で見逃されていた様々な要素の中から、三つの原因を示します。

① 非飲酒者の定義が不適切

「非飲酒者」の中には「病気で飲めない人、病気で飲むのを止めた人」などの不健康な人々が含まれていたことを軽視していた。

② 健康意識の高い飲酒者効果

「アルコールを少量摂取する集団」の中には、もともと健康に対する意識が高く、飲酒以外により健康的な生活を実践していた人々が多かったことを、

統計処理で調整できなかった。

③ 摂取量の申告が不正確

飲酒量は過小申告されやすく、毎日少量の飲酒と、週末の大量飲酒といったパターンの違いを適切に分類できなかった。

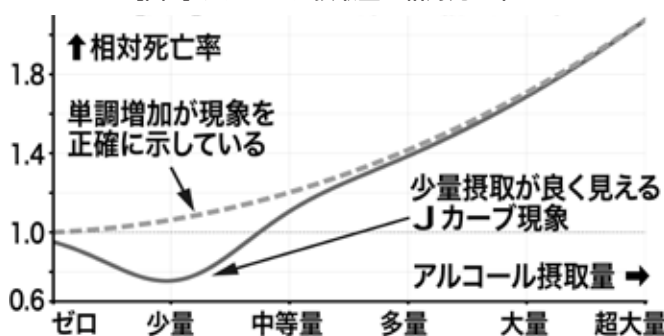
これら①②③を含む疫学研究の限界が、調査結果とその解釈に重大な影響を与えてしまいました。

最近の研究では「非飲酒者」を厳密に定義しており、アルコールを少量摂取する集団を喜ばせるような「Jカーブ現象」は観察されなくなっています(図2点線)。これを受けて、先月3日、国立がん研究センターはがん予防と長生きのために、飲酒は「節酒」から「ひかえる」に変更する、と発表しました。最新の正確な健康法は「科学的根拠に基づくがん予防法5+1」としてまとめられています。(4)

【大智度論にみる酒の害悪】

次に、酒の害毒を厳しく指弾している仏典を見ていきましょう。釈尊が飲酒を禁じたきっかけは、毒龍をも制する神通力を持っていた弟子のサーガタが、接待の席で大量飲酒した挙げ句、釈尊の前で酔い潰れて醜態を晒して

【図2】アルコール摂取量と相対死亡率



しまったことがきつかけとされて
いますが、(5) 摩訶般若波羅蜜多經の
註釈書『大智度論』では、飲酒
による害悪を「三十五失」として
厳しく指弾しています。(6)

「飲酒の三十五失 現代語訳」

- ① 財産喪失 ② 病気の入口
- ③ 争いのもと ④ 裸身をさらし
ても恥じない ⑤ 悪評と不敬
- ⑥ 智慧を失う ⑦ 得られる
ものを得られず得たものを
失う ⑧ 隠しておくべきことを
話す ⑨ 成すべき仕事ができ
ない ⑩ 後悔と憂いのもと
- ⑪ 体力減衰 ⑫ 顔色・容貌・
体調が悪化する ⑬ ⑭ ⑮ 父・
母・出家者・バラモン・伯父・
叔父・年長者・仏・法・僧を
敬わない ⑯ 悪人を友とする
- ⑰ 賢者・善人から遠ざかる
- ⑱ 戒を破る ⑲ 反省の心を失う
- ⑳ 六つの感覚器官(眼耳鼻
舌心意)を制御できない
- ㉑ 色欲に耽り放逸する ㉒ 人から
憎まれる ㉓ 親族や知人からも
見捨てられる ㉔ 不善を行う
- ㉕ 善を捨てる ㉖ 賢人に信用
されない ㉗ 涅槃から遠ざかる
- ㉘ 狂乱愚癡の因縁をよぶ
- ㉙ 死後地獄に墮ちる ㉚ たえ
人間に生まれても精神の安定

を失う。

『大智度論』巻第十三「戒相義」

引き続きこれから三十五失を
偈文にして、ぞつとするほど
見事にまとめています。次の
通りです。

しゅはかくちのそうをうしなう
酒ハ失ウ 覚一知ノ相一
しんしきにこりてあしく
身一色 濁リテ 而 惡シ
ちしんどうじてみだる
智一心 動シテ 而 乱ル
ざんきすてにおびやかされ
慚一愧 已ニ被 劫セ

酒は覚り知る力を失う
生氣を失い身体を壊す
智慧を失い心は乱れ
恥を知る心も奪われる

ねんをしつしてしんじんをまし
失シテ 念ヲ 増シ 瞋一 心ヲ
かんをしつしてしゅうぞくをこぼつ
失シテ 飲ヲ 毀ツ 宗一 族ヲ
かくのごとくをいんとなづといえども
如レ 是ノ 雖モ 名レト 飲ト
じつにはしどくをのむとなすなり
実ニハ 為レ 飲ニ 死一 毒ヲ

正念を失い 怒りが増し
歡びを失い 家族の和を壊す

このように「酒を飲む」とは
実は「死毒」「死を招く毒」を
飲むような行為である

まさにいかるべからざるにいかり
不レニ 應ニ 瞋ル 而 瞋リ
まさにわらうべからざるにわらい
不レニ 應ニ 笑ウ 而 笑イ
まさになくべからざるになき
不レニ 應ニ 哭ク 而 哭キ
まさにうつべからざるをうち
不レニ 應ニ 打ッ 而 打チ

怒るべきでないことを怒り
笑うべきでないことを笑い
泣くべきでないことに泣き
打つべきでないものを打ち

まさにかたるべからざるをかたる
不レニ 應ニ 語ル 而 語ル
きようじんとことなることなし
與ニ 狂一人 無シ 異ルコト
もろもろのぜんくどくをうばう
奪ウ 諸ノ 善一 功一 徳一
さ(はじ)をするものはふおんなり
知レ 愧ヲ 者ハ 不ニ 飲ナリ

語るべきでないことを語り
身心に交調を来した人となり
酒が諸々の善功德を奪う
慚愧の心がある者は酒を飲まない

「道元禪師が示す発心と飲酒」

道元禪師は『正法眼蔵』「重雲
堂式」「衆寮箴規」で、飲酒、酤酒
(酒の売買)を禁じています。

ところが『正法眼蔵』「出家
功德」の巻では『大智度論』から
別の説話を引用し、たとえ飲酒が
きっかけになったとしても、出家の
縁がはてしなく尊いことを、やや
反語的に説示しています。

「原文読み下し」

仏祇洹に在すとき、ひとりの
醉婆羅門あり。来りて仏の
所に到り、比丘とならんことを
求む。仏阿難に勸して、與に
剃頭して法衣を著せしむ。
醉酒既に醒めて、己が身、忽に
比丘となることを驚怪して、
即便ち走り去る。

諸の比丘、仏に問いたてま
つる、
「何を以てか、此の婆羅門を
聴して、比丘となしたまうや。」
仏言く、

「この婆羅門は、無量劫の中に
初めより出家の心なし。今 醉に
よるが故に、しばらく微心を
発す。この因縁をもつての
故に、後に当に出家得道す

べしと。」

是の如くの種々の因縁ありて、
出家の功德無量なり。これを
以て白衣に五戒ありといえ
ども、出家に如かず。

『正法眼蔵』十二巻本第一「出家
功德」(『大智度論』巻第十三
初品第二十三 戸羅波羅蜜義
より道元禪師が引用(7))

「現代語訳」

(龍樹菩薩が著した『大智度論』に
このような逸話がある)

「釈尊が祇園精舎にいらつしやる
時に、一人の酔ったバラモンが
やって来て、(仏教の)『僧に
なりたい』と願ひ出た。釈尊は
阿難に命じてバラモンの髪を
剃り、僧衣を着せてやった。

ところがバラモンは酔いから
醒めると、自分が突然僧の姿に
なっていることに驚いて、走り
去ってしまった。弟子たちは
釈尊にお尋ねした。『なぜ酔っ
払いのバラモンに入門を許して
僧にしたのですか?』

釈尊は次のように示された。
『このバラモンは、はるか昔から
出家の心はなかった。ところが

今酒に酔ったことで、わずかながら発心したのだ。(今日は帰ってしまったが)この因縁によって、後に本当に出家して仏道を歩むことであろう。』

このように、出家の機縁には様々な因縁があるが、出家の功德は無量である。在家には五戒があるが、それは出家の戒に及ばない。

飲酒の正当化ではありません。たとえ泥酔が機縁になったとしても、出家の功德は無量なのである、と解釈するべきでしょう。釈尊は酒そのものだけでなく、飲酒によって生じる「放逸」を問題にしているのです。

【まとめ】

アルコールは依存性薬物であり、少量から有害です。従来主張されていた「適量」はありません。仏教が不飲酒を定めるのは、不健康、生活の破綻、人間関係、倫理の崩壊のみならず、放逸、破戒、無慚無愧、不善、善法の放棄、涅槃から遠ざかる、悪道に墮ちるなどの悪行が次々と発生するからです。

つまり飲酒とは単独の問題では

なく、放逸を端緒とした様々な悪行の根本にあるのです。不飲酒戒は、単なる禁戒ではなく、酒に対する執着から解放された自由な心と、健やかな身体にこそ本来の幸福が宿ることを示す教えです。

【附記】

(1) インターネットを通して入手できる 柳幹康先生の論考が秀逸です。「般若湯」の慣行や神仏習合で「御神酒」が入手しやすかったなどの指摘があります。月刊「花園」第73巻9・10・11号 2023年。
<http://iriz.hanazono.ac.jp/yomimono/index.html>

(2) 国際がん研究機関(IARC)の概要とIARC発がん性分類について 農林水産省ホームページ 2025年。

(3) 「飲み続けると強くなる」は本当だがそもそも飲酒量はゼロのほうがいい 葉石かおり プレジデントオンライン 2023年。

(4) 「科学的根拠に基づくがん予防法5+1」をより伝わりやすく刷新 飲酒は「節酒」から「ひかえる」国立がん研究センター報道発表 2026年6月。

(5) 「四分律」巻第十六「国訳一切経」律部二十五 大東出版社 昭和10年。

(6) 「戒相義」『大智度論』巻第十三初品第二十二。『大正蔵』卷25 P158『国訳一切経』釋經論部一P369 大東出版社 昭和10年。

『大智度論』は龍樹(ナーガールジュナ)撰述と伝えられる『摩訶般若波羅蜜多經』の注釈書。

「大」は「摩訶」「智」は「智慧」「般若」の意。鳩摩羅什の漢訳は原典に大幅な付加を加えたことされる。

後の大乘仏教の母胎となった。

(7) 「出家功德」『正法眼蔵』十二卷本 P 922 ~ 923 大法輪閣 2019年。原典は『大智度論』

卷第十三 初品第二十三「戸羅波羅蜜義」『大正蔵』卷25 P161

『国訳一切経』釋經論部一 P 379 大東出版社 昭和10年。

(8) 道元禪師は同じく『大智度論』

に見える蓮華色比丘尼の説話(遊女が戯れに袈裟を着けた功德によつて後生に出家し、最後には阿羅漢となった)を、『正法眼蔵』

「袈裟功德」に引用されています。この説話は(7)の直前にあります。

出家と同様、袈裟の功德も無量です。(門原後堂老師より)

瑞應寺専門僧堂

安居者募集

安居を希望される方には、掛塔志願書を送付致しますので、左記にご連絡下さい。

〒792-0835 愛媛県新居浜市山根町八一
電話 (〇八九七) 四一・六五六三
FAX (〇八九七) 四〇・三一二七



僧堂内朝課

師真道隆邦 瑞應寺修行の思ひ出話より 其の肆・余滴

文責 山口県下松市 妙光寺住職

山 縣 洋 典

この話には、後日談があります。師が修行を終え自坊へ戻り数十年が過ぎた頃、何かの機会に瑞應寺様で二人が会った時の事です。師隆邦が久しぶりですねと声をかけた際、玄洞老師は、顔は分かるが名前が思い出せないと言いました。誤らないと謝られました。それを聞いて師曰く、ムツとしたので、ちよつと意地悪く私は貴方が初めて高座に登った時の事を今でも覚えていたよと言ったと、玄洞老師はハツとされて隆邦さん、久しぶりですねと返されたそうです。

それ以降、顔を合わせた時には、玄洞老師の方から挨拶されるようになったとの事です。現在、既に全員が鬼籍に移られ、格別口止めをされた訳ではないのでこの場で、このエピソードを披露する事、ご関係の方がおられましたら、どうかお許し下さい。実はこの言わば師からの餞別ともいえる話を聞いた私は、勇んでいた心が少し楽に軽くなった気がして上山に向けて支度が捗り始め感謝致しました。

いずれにしても、玄洞老師が一月一日、師隆邦が一月三日というのも不思議なご縁を感じております。残念ながら、拙が玄洞老師のご遷化を知ったのが後日の為、師にその旨伝える事は出来ませんでした。

ここで、今回も拙の事を少し書かせて頂くことと寛容下さい。数十年前、拙が小学生低学年の頃、師に連れられて一光老師に拝問した事がありました。今、思い出すと何処かの県内寺院での授戒会であつたと思います。

そして師が拙を一光老師に紹介した際、老師は私の顔をなでながら「良いお坊様になるんだよ、大きくなったら瑞應寺に来ておくれ」と言われました。しかし当時の拙は、正直眼光厳しく痩せて気骨が滲み出たような、一光老師が怖くて何の返事も出来ませんでした。その後、皆様がご存知の通り昭和の終期にご本山の後堂として上山されましたが、拙とは入れ違いで瑞應寺様に帰山されたため、直

接の薫陶を受ける事は叶いませんでした。

内心、少し忸怩たる思いを抱えたまま数十年が過ぎ、一光老師のご葬儀の際、師を瑞應寺様まで送り届けた時の事です。当初は一緒に随喜する予定でしたが、拙は瑞應寺様に安居して一光老師に教えを受ける事が出来なかった申し訳ない気持ちがあつて、どうしても堂内に入る事が出来ませんでした。

結局一人山門で、堂内から漏れ流れてくる鳴らし物の音や読経に合わせて、お拝等をさせていただき、帰路に就いた次第です。決して自身の歩んできた仏道を後悔や、卑下するつもりはありませんが、もしもあの時と思う気持ちは今でも心中に澱のように残っているのも事実です。

以前、当時の修行に関して、師から仄聞した話の中で、才氣あふれる指導者の方々を、空に煌めく星のようと例えた事があります。その後、修行時代の事を多くのご関係各位から、個々のお話を聞くご縁を賜りました。そうしたお言葉を傾聴させていただき、その中のお一人から心に残る言葉があります。

それは瑞應寺と言う宝石箱の中に、様々な光を放つ宝石の様な老

師方々がお互いを意識し、切磋琢磨をされている。その箱の隙間に煩惱だらけの小石や、我見や我執で尖った砂利のような修行僧が挟まり毎日の修行が続くのだ。

当然それぞれが、役職や役務に関係なくお互いをぶつけ合いながら磨き上げられていき、修行期間や内容は皆違えども、後々考えたら、殆どの修行僧は宝石にはなることはないが、誰もが光沢のある碁石となる事ができたと思う。

その方の話によると、自坊に帰り日々のお勤めで迷いが生じた時、先ず自分を碁石に例えて一番悩みの絡んだ線上の盤目に置くようにする。そこが決まれば、また一つ隣の盤目に法友も碁石に例え置く。大事な要の箇所には、宝石の老師を配する。そうして鳥瞰すると、それが筋の通った良き道だと気付かされる。

つまりその正しき道に導いて下さるのは、修行時代の老師の方々の教えであり、寝食を共にした法友の笑い顔や泣き顔で、何十年後の今も変わらないと言われました。話し終わるとその方は、少し涙を見せられて合掌されました。その視線の先には、間違いなく当時の老師の方々と法友、そしてその全てを育む大きな銀杏の木がある尊い瑞應寺専門僧堂が見えていた

に違いありません。

最後に

拙はこうしたご報告等を賜り、師隆邦も同じ様な気持ちで瑞應寺様の全てを信じ切り、そこでの修行を糧にしたからこそ、九十近くまでお勤めをさせていただけたのだと確信しています。その結果、悔いなき僧侶人生を全うできたのだと思う次第です。

最後になりましたが、こうした素晴らしい瑞應寺様の更なる隆盛と、ご関係各位のご健勝を心より祈念申し上げます。最後までお付き合ひいただきありがとうございます。 洋典九拝



テレホン法話 (〇八九七) 四一・〇〇三三

禅のたより



◆初心忘るべからず

新年度を迎えて早ひと月、葉桜も一段と緑が濃くなる季節です。この時期、何か新しい目標を立てただけ立て、すっかり忘れてしまっているのは、私だけではないはず。華嚴経に「初発心しよはつしんの時に、便ち正覚しやうがくを成す。」という言葉があります。道を求める心を起こしたときに、すでに正しいさとりの完成している。という意味の言葉で、道を求めようと決意した瞬間の最初の純粹な心こそが最も尊く、仏の心さとりのものである。そして、何か目的を達した場合にも、その心は初発心に他ならないので、「ああ、これでいい」と思うのではなく、絶えず道を求め、しかも最初の心構えのままで進んでゆかねばならない、(思うだけでなく、しっかりと行いなければならぬ)という趣旨も含まれています。

めるのではなく、さとりを得た後も一生涯修行を積み重ねていく、という教えを想起させられます。今、瑞應寺専門僧堂でも新到しんたう(新たに道場に来た修行僧)さんを迎えています。今春は古参の修行僧が居らず、例年よりも長い時間、新到さんと一緒に過ごしています。坐禅や礼拝などの僧堂修行での基本的な作法を、緊張しながらもひたむきな姿勢で行じる姿を目の当たりにして、これまで何千回、何万回もやっていて、いつの間にか惰性で行じている自分の姿に恥入るばかりです。

真摯にさとりを得ようと発心したときには、たとえはじめで拙くとも、一滴を味わって大海全体の味を知るように、さとりの本質をつかんでいる、「初心の弁道すなわち本証の全体なり」と。たとえ新到さんであっても、かえって教わるがあります。初心忘るべからず。真剣な初心を保つことが、仏道修行で一番大切なことなのかもしれません。

維那 吉松 聖博
 令和八年五月一日〜十日

◆身命は露よりも脆し

先日、私が住職をさせていただいているお寺の役員さんが亡くなられた。九年前、晋山結制という大きな行持があつたときは総代の長としてご尽力をいただいた方であつた。

この春のお彼岸にお参りさせてもらったときは普段と変わりの様子で、私の曾祖父である先々代代の住職の昔話をしてくださった。初めて聞くお話で、私の知らないご先祖様のお話でもあつたので興味深く、また夏のお盆参りの時に続きを聞かせてもらおうなどと思っていた矢先であつたので、とてもショックであつた。老僧の昔話をしてくださったことは、ご自身の体調から、思うところがあられたのかもしれない。もつとしつかり話を聞いておけばよかった。もう同じ話ができる方はこの世にはおられないだろう。

「光陰は矢よりも速やかなり、身命は露よりも脆し」「何れの善巧方便ありてか過ぎにし一日をふたたび還し得たる」修証義に引用されている道元禅師の「正法眼蔵・行持の巻」の一文であります。時の流れは速く、この命は先の保証のない、草露のようなものであります。そして、過ぎてしまった一日は、どんなに素晴らしい仏様の御教えであつても戻ってやりなおすことができないのであります。

平生、お唱えの中で、またお通夜の話の中でよく触れている御教えであり、自分はわかつているつもりになっていたが、そうではないことを教えていただく縁をいただいた。

過ぎた過去を悔いても、こうありたかったという未来を描いても、我々は今ここにしか生きられない。「今ここ」を大事に、一日一日のご縁を一層大切にしていきたいものです。

知殿 古川 承久
 令和八年六月一日〜十日

聖護寺にて 参禅・作務希望者募集

日頃の慌ただしい時間を離れ、大智禅師の開かれたお寺で大自然とともに息を調えて、参禅並びに作務をしてみませんか？

日時については要相談。
 連絡は瑞應寺まで。
 聖護寺にて、毎月月例参禅会を開催中。



聖護寺 托鉢

あなたも
 唱えてみませんか

～出会いと安らぎを求めて～



お仲間募集中

梅花流詠讃歌は曹洞宗のご詠歌(仏讃歌)です

曹洞宗 梅花流詠讃歌
<http://www.sotozen-net.or.jp/baika>

詳しくは
 瑞應寺受処まで
 ご連絡下さい

(0897) 41-6563





■夏安居入制

五月十四日(木)より、配役行茶入寺式、楞嚴会啓建等、入制行持が行われ、三ヶ月の夏制中に入った。制中の第一座にあたる首座は近藤一敬(広島県広島福寺徒弟)が務める。

山内大衆乳水和合し、今制中切磋琢磨・辨道精進し、仏道修行の無事円成を誓願した。



人事行礼

■宮地弘商事参禅研修

六月四・五日、一泊二日にて宮地弘商事の新人社員研修会が行われた。



宮地弘商事参禅研修

■般若入

五月下旬より、当地区恒例行事である「般若入」を厳修。作付けの時期に合わせて地域の五穀豊穡・家内安全・身体健全を祈願した。

■聖護寺春大祭

五月二十四日、聖護寺春大祭法要を本堂にて厳修。



聖護寺春大祭

■法戦式

今夏制中、近藤一敬師の法戦式が六月二十五日(木)に修行され、「永平頌古・身心脱落」に就いて法問を戦わせた。当日は、僧堂諸役寮師、梅花講、和敬会等随喜した。
また、前晩は金岡山主による本則提唱も行われた。



本則行茶



本則提唱

五月の日鑑

一日	祝 禱
三日	日曜参禅会
十日	日曜参禅会
十四日	配役行茶・入寺式 楞嚴会啓建・衆寮諷經 土地堂念誦・庫司点湯 祝 禱・小参・人事行礼・略布薩
十五日	日曜参禅会
十七日	日曜参禅会
十八日	観音講(仏教勉強会)
廿四日	日曜参禅会
卅一日	日曜参禅会・略布薩

六月の日鑑

一日	祝 禱
四・五日	宮地弘商事参禅研修
七日	日曜参禅会
九日	参玄会(十日迄)
十一日	護寺会総会
十四日	日曜参禅会
十五日	祝 禱・略布薩
十八日	観音講(仏教勉強会)
廿日	ヘルモニー合同慰霊祭
廿一日	日曜参禅会
廿四日	大本山永平寺監院 小林昌道老師他二名来山 本則行茶
廿五日	首座法戦式
廿八日	日曜参禅会
卅日	略布薩

七月の予定

一日	祝 禱
五日	日曜参禅会
十二日	四国地区理事会参禅 日曜参禅会
十五日	祝 禱・略布薩
十八日	観音講(仏教勉強会)
十九日	日曜参禅会
廿日	先住忘
廿六日	日曜参禅会
卅日	筆供養・弁天大祭
卅一日	略布薩

八月の予定

一日	祝 禱
二日	日曜参禅会
六日	住友展墓
七日	楞嚴会満散・土地堂念誦
八日	小参・人事行礼
九日	日曜参禅会・淡交会供茶会
十五日	祝 禱・略布薩
十六日	日曜参禅会・水施食
十八日	観音講(仏教勉強会)
廿日	淡交会学校茶道坐禅会
廿三日	日曜参禅会
卅日	日曜参禅会
卅一日	略布薩



鐘 声

七月になればお山開きで石鍾山がにぎわう。十年以上前になるが、同安居法友を誘い拝登。白装束の修験者に交じり山頂を目指したが、途中の高山植物の得も言えぬ香りと山頂からの景色に感動を覚えた。

昨今は登山ブームで老若男女が山頂を目指す、そこに自然の山川草木に対する畏敬の念が有りや無きや。全国各地では害獣による被害が多数、暮らし方が様変わりした結果、山の様子も随分と変わってきているのであろうか。

佛國山でも祠堂殿法堂仙友閣幼稚園まで、山に面した屋根にはオサルさんが時折現れる様子。人里に動物が下りてくるのか、動物のすむ自然に人が住んでいるのか、果たして害獣とは如何。猿猴の樹を得て、騰躍跳躍して、禁制す可きこと難きが如し放逸ならしむることなくの坐禅精進有難し。
(道)